

永井荷風と日本社会：

続・永井荷風のフランス受容とその社会思想的含意

菊 谷 和 宏

はじめに

本稿は、永井荷風のフランス受容過程を追いつその含意を検討することで、日本におけるフランス社会思想受容のこれまであまり光が当てられてこなかった一端を明らかにし、もって現代に生きる我々自身の「日本社会」に対する理解と態度を問い直す作業の第二弾、第二論考である。

昨年発表した第一論考（菊谷 2013）でもお断りした通り、本稿は、「文学者」永井荷風（1879（明治 12）年 12 月 3 日－1959（昭和 34）年 4 月 30 日）を扱うものの、文学研究ではない。そうではなく、フランスと日本の社会の有様を深く体験し激動の時代を生き抜いた一人の人間として荷風を扱い、その社会的意義を抽出しようとするものである。つまり本稿は、社会思想史の研究である。したがって文献としては、荷風の創作した数多くの物語と同じくらいに、時にはそれ以上に、日記や随筆を参照することとなる。中でも、彼が人生の後半の約 42 年間、その時々々の社会状況とこれに対する思いを記し続けた膨大な日記『断腸亭日乗』には多くを負うことになるだろう。

とはいえ、荷風のフランス受容の全容を、前稿と合わせても 200 枚ほどしかない短い論考で明らかにすることはできない。前稿同様本稿もまた、来るべき十全たる論述の「準備稿」であり、荷風の人生と時代の進行に沿って順に要点を抽出し、もって全体像を素描することを目的とするものである。よって、本稿はいささか荒削りなものであることを、あらかじめお断りしておきたい。

第四節¹⁾ 「日本」体験

1. 大逆事件の衝撃

1911（明治 44）年のある日、永井荷風は幸徳秋水らを乗せた囚人馬車を偶然目撃し、巨大な衝撃を受けた。

明治四十四年慶応義塾に通勤する頃、わたしはその道すがら折々四谷の通で囚人馬車が五六台も引続いて日比谷の裁判所の方へ走つて行くのを見た。わたしはこれまで見聞いた世上の事件の中で、この折程云ふに云はれない厭な心持のした事はなかつた。わた

1) 節立ては先稿菊谷 2013 から連続。

しは文学者たる以上この思想問題について黙してゐてはならない。小説家ゾラはドレフユー事件について正義を叫んだ為め国外に亡命したではないか。然しわたしは世の文学者と共に何も言はなかつた。わたしは何となく良心の苦痛に堪へられぬやうな気がした。わたしは自ら文学者たる事について甚しき羞恥を感じた。以来わたしは自分の藝術の品位を江戸作者のなした程度まで引下げるに如くはないと思案した。その頃からわたしは煙草入をさげ浮世絵を集め三味線をひきはじめた。わたしは江戸末代の戯作者や浮世絵師が浦賀へ黒船が来やうが桜田御門で大老が暗殺されやうがそんな事は下民の与り知つた事ではない——否とやかく申すのは却て畏多い事だと、すまして春本や春画をかいてゐた其の瞬間の胸中をば呆れるよりは寧ろ尊敬しやうと思立つたのである。（『荷風全集』第十四卷、「花火」：256：強調引用者²⁾）

この荷風の大逆事件体験はこれまで、荷風研究および大逆事件研究の中で何度も語られ、またその意味、とりわけ荷風の真意について、「政治的信念の現れ」説から「単なる一時の思いつき」説まで、諸家によるかまびすしい論争を巻き起こしてきた。それはそれぞれに正しいものであり、また実り多い論争だったように思われる。

そんな中であって、本稿では、この事件と荷風の間接的関係、前稿に引き続いて荷風のフランス受容の視点から、社会思想史の視点から照射してみよう。というのも、荷風自身引き合いに出している通り、この問題は、知識人としての荷風の基点であり基盤をなすエミール・ゾラと、正確にはゾラのドレフュス事件の際の行動と深く関係しているからであり、したがって、このような方向からの検討は、（フランスで歴史的に生み出された³⁾）「社会」概念と日本の「社会」的現実との異同を解き明かし、「日本社会」に生きる我々自身の置かれた「社会的」状況の十全な理解に達する、その一助となりうるからである。

さて、荷風が大逆事件を「思想問題」として捉え、ゾラと自分を比べて恥じていることは明らかだ。だが正確に言って、なぜ、何に対して恥じているのか？

本稿では以下この問いを念頭に置きつつ、前稿で明らかにした諸点と共に、帰朝以後の荷風の思想を、日本史の進行を追いつつ明らかにしていこう。その結果として、（前稿で見た通り）洋行帰りの荷風が語っていた「真の文明の内容」「社会的共同生活の意義」もより一層明らかなものとなるであろう。

2) 「花火」の発表はこの遭遇の八年後、1919（大正8）年である。同時期には、江戸時代の戯作者に対する同様の言及が他にも見られる。例えば『断腸亭日乗』1919（大正8）年4月6日（『荷風全集』第二十一巻、『断腸亭日乗』：64-65）など。

3) 拙著菊谷 2011 をご参照いただきたい。

2. 市井における軍国主義的国家主義の進行

荷風が帰った日本は国家主義が次第次第に台頭する過程にあった。前稿末で触れた通り、荷風自身も『ふらんす物語』発禁処分という形で直面させられた。⁴⁾

そんな中、いわゆる大逆事件（幸徳事件とも）が起こる。

日本の政治史と社会史に甚大な影響を与えたこの事件の詳細をここで説明する紙幅はない。それは現在準備中の別稿に譲ろう。ただごく簡潔に事件をまとめれば、明治天皇暗殺計画の発覚を機とした国家による社会主義者・無政府主義者弾圧事件であり、非公開にして極短期間の裁判により幸徳秋水ら24人が死刑宣告を受け、内12人が処刑されたものである。ただし、後世の研究により、事件の首謀者とされた幸徳秋水を含む死刑囚の大半が無実・無関係であり、事件それ自体が思想弾圧のための、国家権力による典型的なフレームアップ（でっち上げ）、つまり意図された冤罪事件であったことがわかっている。

このでっち上げの事実は、事件と同時代の知識人の間では既によく知られていた。荷風もちろんその一人だ。そして彼は、この事件から受けた深い衝撃を八年後に表現した。それが前項冒頭の引用文である。

しかし、大逆事件そのものについて荷風はこれ以上詳論していない。したがって、もしこの衝撃の意味を、とりわけ我々の関心事であるその社会思想的意義を捉えようとするならば、前稿の知見を前提としつつ、さらに、大逆事件以後の荷風の思想を背景史と共に検討する必要がある。

そこで以下、1917（大正6）年9月16日から死の前日の1959（昭和34）年4月29日までほぼ42年にわたって書き続けられた彼の日記『断腸亭日乗』を資料として用いて、その膨大な文章の中に、彼の社会に関する思想、殊に日本社会に関するそれを探ってみよう。

となれば、何はともあれこの時期に、帰朝後の永井荷風が実際に経験し記録した事実を丹念に追う必要がある。すると以下の通り、この時期日本が、秋水の言う帝国主義すなわち軍国主義的な国家主義に突き進んでゆく様子がまざまざと浮かび上がってくるのだ。

日本がいわゆる十五年戦争へと突き進む最初の決定的な一歩は満州事変（1931（昭和6）年9月18日）であるとされる。しかし、荷風の記録によればそれ以前から既に世は荒れ始めていたようだ。

新聞紙連日支那人排日運動の事を報ず。要するに吾政府薩長人武断政治の致す所なり。国家主義の弊害卻て国威を失墜せしめ遂に邦家を危くするに至らずむば幸なり。（『荷風全集』第二十一巻、『断腸亭日乗』1919（大正8）年5月25日：71）

4) 拙稿菊谷 2013 第三節第6項「忍び寄る国家主義：『ふらんす物語』発禁」

そんな中、1923（大正12）年9月1日関東大震災が発生し、世の荒廃に拍車をかける。

習爽雨歇みしが風猶烈し。空折と搔曇りて細雨烟の来るが如し。日將に午ならむとする時天地忽鳴動す。予書架の下に坐し嚶鳴館遺草を読みゐたりしが、架上の書帙頭上に落来るに驚き、立つて窗を開く。門外塵烟濛々殆咫尺を辨せず。兒女雞犬の声頻なり。塵烟は門外人家の瓦の雨下したるが為なり。予も亦徐に逃走の準備をなす。時に大地再び震動す。書卷を手にし、表の戸を排いて庭に出でたり。数分間にしてまた震動す。身体の動揺さながら船上に立つが如し。門に倚りておそる――吾家を顧るに、屋瓦少しく滑りしのみにて窗の扉も落ちず。稍安堵の思をなす。昼餉をなさむとて表通なる山形ホテルに至るに、食堂の壁落ちたりとて食卓を道路の上に移し二三の外客椅子に坐したり。食後家に帰りしが震動歇まざるを以て内に入るに能はず。庭上に坐して唯戦と競々たるのみ。物凄く曇りたる空は夕に至り次第に晴れ、半輪の月出でたり。ホテルにて夕餉をなし、愛宕山に登り市中の火を觀望す。十時過江戸見阪を上り家に帰らむとするに、赤阪溜池の火は既に葵橋に及べり。河原崎長十郎一家来りて予の家に露宿す。葵橋の火は靈南阪を上り、大村伯爵家の鄰地にて熄む。吾廬を去ること僅に一町ほどなり。（*ibid.* 1923（大正12）年9月1日：237-238）

快晴始めて百舌の鳴くを聞く。午後丸の内三菱銀行に赴かむとて日比谷公園を過ぐ。林間に仮小屋建ち連り、糞尿の臭気堪ふ可からず。公園を出るに爆裂弾にて警視庁及近傍焼残の建物を取壊中往來留となれり。数寄屋橋に出で濠に沿ふて鍛冶橋を渡る。到る處糞尿の臭気甚しく支那街の如し。帰途銀座に出で烏森を過ぎ、愛宕下より江戸見阪に登る。阪上に立つて來路を顧れば一望唯渺々たる焦土にして、房総の山影遮るものなければ近く手に取るが如し。帝都荒廢の光景哀れといふも愚なり。されどつら――明治以降大正現代の帝都を見れば、所謂山師の玄関に異ならず。愚民を欺くいかさま物に過ぎざれば、灰燼になりしとてさして惜しむには及ばず。近年世間一般奢侈驕慢、貪欲飽くことを知らざりし有様を顧れば、この度の災禍は實に天罰なりと謂ふ可し。何ぞ深く悲しむに及ばむや。民は既に家を失ひ国帑亦空しからむとす。外觀をのみ修飾して百年の計をなごゝる国家の末路は即此の如し。自業自得天罰觀面といふべきのみ。（*ibid.* 1923（大正12）年10月3日：245）

そして、

震災後わが現代の社会を見るに其の表面のみ纔に小康を保つに過ぎず、政府の威信は政

党政治のために全く地に墮ち、公明正大の言論は曾て行はれたることなく暴行常に勝利を博するなり、当今の世は幕府瓦解の時代と殆異るところなきが如し（『荷風全集』第二十二卷、『断腸亭日乗』1928（昭和3）年4月10日：159）

車にて丸の内を過るに青年団の行列内幸町辺より馬場先門までつゞきたり、先達らしき男或は日本魂或は忠君愛国など書きたる布片を櫛がけになしたり、是日紀元節なれば二重橋外に練り出して宮城を拝するものなるべし、近年此の種類^の示威運動大に流行す、外見は国家主義旺盛を極るが如くに思はるとなれど実は卻て邦家の基礎日に――危くなれることを示すものなるべし、何事に限らず外見を飾りて殊更氣勢を張るやうになりては事は既に末なり、然れども今の世に身を処するには何事に限らず忠君愛国を唱へ置くに如かず、梅毒治療剤の広告にも愛国の文字は大書せられたり（*ibid.* 1929（昭和4）年2月11日：248-249）

この社会的荒廃を背景にして、1931（昭和6）年9月18日、ついに満州事変が勃発する。

号外壳屢門外を走り過ぐ、満洲の戦報なるべし（*ibid.* 1931（昭和6）年9月22日：422）

満洲戦乱の号外壳出づ（*ibid.* 1931（昭和6）年9月25日：422）

この後、日本の軍国主義的国家主義は急速に進む。

晩食の後銀座を歩み冬物を購ひ酒肆太酤に一酌す、数名の壮士あり卓を囲んで大声に時事を論ず、窃にきくに、頃日陸軍将校の一团首相若槻某を脅迫し、ナポレオンの轡に倣ひクーデタを断行せむとして果さず、来春紀元節を期して再挙を謀ると云ふ、今秋満洲事変起りて以来此の如き不穩の風説到处に盛なり（*ibid.* 1931（昭和6）年11月10日：435：強調引用者）

白木屋店頭に群集雑還す、立寄りて見るに満洲出征軍人野營の状を活人形につくりたるなり、時に号外壳声をからして街上を疾走す、天津居留地および錦洲城内戦闘の事を報ずるなり（*ibid.* 1931（昭和6）年11月27日：439）

早朝より花火の響きこえ、ラデオの唱歌騒然たるは紀元節なればなるべし、〔以下十二行半抹消、二行半切取。以下行間補〕⁵⁾ 去秋満洲事変起りてより世間の風潮再び軍国主

義の臭味を帯ぶること益々甚しくなれるが如し道路の言を聞くに去秋満蒙事件世界の問題となりし時東京朝日新聞社の報道に関して先鞭を日々新聞につけられしを憤り営業上の対抗策として軍国主義の鼓吹には甚冷淡なる態度を示しめたりし処陸軍省にては大に之を惡み全国在郷軍人に命じて朝日新聞の購読を禁止し又資本家と相謀り暗に同社の財源をおびやかしたり之がため同社は陸軍部内の有力者を星ヶ岡の旗亭に招飲して謝罪をなし出征軍人慰問義捐金として金拾万円を寄附し翌日より記事を一変して軍閥謳歌をなすに至りし事ありしと云この事若し真なりとせば言論の自由は存在せざるなり且又陸軍省の行動は正に脅嚇取財の罪を犯すものと謂ふ可し（*ibid.* 1932（昭和7）年2月11日：469-470）

そして、満州事変のわずか八ヶ月後には、犬養毅首相が軍士官に暗殺される事件が起こった。いわゆる五・一五事件である。

日曜日なれば街上の賑ひ一層盛なる折から号外売の声俄に聞出しぬ。五時半頃陸海軍の士官五六名首相官邸に乱入し犬養を射殺せしと云ふ。警視庁及政友会本部にも同刻に軍人乱入したる由。初更の頃家に帰るに市兵衛町表通横町の角々に巡查刑事二三名づ、佇立み、東久邇宮邸門前には七八名立ち居たり。如何なるわけあるにや。近年類に暗殺の行はるゝこと維新前後の時に劣らず。（*ibid.* 1932（昭和7）年5月15日：524）

さらに四年後には、とうとう二・二六事件が、すなわち軍事クーデターが勃発するまでの事態にいたったのだ。

〔此間約四字抹消。以下行間補〕軍人〔以上補〕警視庁を襲ひ同時に朝日新聞社日と新聞社等を襲撃したり。各省大臣官舎及三井邸宅等には兵士出動して護衛をなす。ラヂオの放送も中止せらるべしと報ず。〔中略〕九時頃新聞号外出づ。岡田斎藤殺され高橋重傷鈴木侍従長又重傷せし由。（『荷風全集』第二十三卷、『断腸亭日乗』1936（昭和11）年2月26日：394-395）

-
- ✓ 5) 荷風は日本における国家主義の進展に危機を覚え、問題とされそうな箇所を後日削除している。これは無論自己検閲であり、さらに後日思い直し、それ以降削除を止める。そして削除箇所を復元しようとも試みるが、これは果たしえなかった。この点について詳細は、『荷風全集』第二十四巻「後記」を参照されたい。

3. 太平洋戦争突入、そして敗戦

同時期、文学者荷風の身近にも、もちろん国家主義は忍び寄る。

今春丸善書店に注文したる洋書悉く輸入不許可の趣丸善より通知あり。戦禍憂ふべきなり。(『荷風全集』第二十四卷、『断腸亭日乗』1938(昭和13)年4月3日:150-151)

〔以下七行弱切取。以下欄外補〕一月十三日晴、旅順要塞司令部より旅順占領三十年祭につき詩歌を揮毫し郵送すべしとの書状来る軍人間に余が名を知られたるは恐るべく厭ふべきの限りなりいよ――筆を焚くべき時は来れり〔以上補〕(*ibid.* 1940(昭和15)年1月13日:341)

市井の状況はますます悪化する。

水天宮裏の待合叶家を訪ふ。主婦語りて云ふ。今春軍部の人の勧めにより北京に料理屋兼旅館を開くつもりにて一ヶ月あまり彼地に往き、帰り来りて売春婦三四十名を募集せしが、妙齡の女来らず。且又北京にて陸軍将校の遊び所をつくるには、女の前借金を算入せず、家屋其他の費用のみにて少くも二万円を要す。軍部にては一万円位は融通してやるから是非とも若き士官を相手にする女を募集せよといはれたれど、北支の氣候余りに悪しき故辞退したり。北京にて旅館風の女郎屋を開くため、軍部の役人の周旋にて家屋を見に行きしところは、旧二十九軍将校の宿泊せし家なりし由。主婦は猶売春婦を送る事につき、軍部と内地警察署との聯絡その他の事をかたりぬ。〔此間三行弱抹消。以下行間補〕世の中は不思議なり。軍人政府はやがて内地全国の舞踏場を閉鎖すべしと言ひながら戦地には盛に娼婦を送り出さんとす軍人輩の為すことほど勝手次第なるはなし〔以上補〕。(*ibid.* 1938(昭和13)年8月8日:190-191)

新聞記者の来訪を避けむとて正午カメラを手にして家を出づ。虎の門其他の辻々に愛国心煽動の貼札また更に二三種加はりたり。(*ibid.* 1938(昭和13)年10月8日:209)

この頃町の辻々に日独伊軍事同盟のビラ政党解散を宣言するビラ貼り出さる。(*ibid.* 1939(昭和14)年5月10日:273)

オペラ館は来週戦争物を演ずる由、そのため憲兵隊より平服の憲兵一人来り稽古を検分す。其筋の干渉ます――苛酷となりたるを知るべし。(*ibid.* 1939(昭和14)年7月2日:287)

世の噂によれば日本は独逸伊太利両国と盟約を結びしと云ふ。〔此間三行弱切取。以下欄外補〕愛国者は常に言へり日本には世界無類の日本精神なるものあり外国の真似をするに及ばずと然るに自ら辞を低くし腰を屈して侵畧不仁の国と盟約をなす国家の恥辱之より大なるは無し（*ibid.* 1940（昭和15）年9月28日：412-413）

日米開戦の噂しきりなり。新聞紙上の雑説殊に陸軍情報局とやらの暴論の如き馬鹿々々しくて読むに堪えず。（*ibid.* 1941（昭和16）年9月3日：555）

街頭の集会広告にこの頃は新に殉国精神なる文字を用出したり。愛国だの御奉公だの御国のためなぞでは一向き、目なかりし故ならん歟。人民悉く殉死せば残るものは老人と女のみとなるべし。呵々。（*ibid.* 1941（昭和16）年9月7日：557）

そしてついに、太平洋戦争勃発。

日米開戦の号外出づ。帰途銀座食堂にて食事中燈火管制となる。街頭商店の灯は追々に消え行きしが電車自動車は灯を消さず、省線は如何にや。余が乗りたる電車乗客雑沓せるが中に黄いろい声を張上げて演舌をなすものあり。（*ibid.* 1941（昭和16）年12月8日：592）

開戦布告と共に街上電車其他到处に掲示せられし広告文を見るに、屠れ英米我等の敵だ進め一億火の玉だとあり。〔中略〕現代人のつくる広告文には鉄だ力だ国力だ何だかだとダの字にて調子を取るくせあり。寔に是駄句駄字と謂ふ可し。（*ibid.* 1941（昭和16）年12月12日：593）

しかし戦況は次第に悪化。

上野動物園の猛獣はこの程毒殺せられたり。帝都修羅の巷となるべきことを予期せしが為なりと云。夕刊紙に伊太利亜政府無条件にて英米軍に降伏せし事を載す。秘密にしては居られぬ為なるべし。（『荷風全集』第二十五卷、『断腸亭日乗』1943（昭和18）年9月9日：147）

来十月中には米国飛行機必来襲すべしとの風説あり。上野両国の停車場は兩三日この方避難の人達にて俄に雑遯し初めたりと云。（*ibid.* 1943（昭和18）年9月28日：154）

噂通り東京にも空襲が始まり、住み慣れた自宅偏奇館も、蔵書と共に焼失。

夜半空襲あり、翌曉四時わが偏奇館焼亡す〔中略〕余は枕元の窓火光を受けてあかるくなり鄰人の叫ぶ声のたゞならぬに驚き日誌及草稿を入れたる手革包を提げて庭に出でたり、谷町辺にも火の手の上を見る、又遠く北方の空にも火光の反映するあり、火星は烈風に舞ひ紛々として庭上に落つ、余は四方を顧望し到底禍を免るゝこと能はざるべきを思ひ〔後略〕(ibid. 1945 (昭和 20) 年 3 月 9 日 : 306)

嗚呼余は着のみ着のまゝ家も蔵書もなき身とはなれるなり、余は偏奇館に隠棲し文筆に親しみしこと数れば二十六年の久しきに及べるなり (ibid. 1945 (昭和 20) 年 3 月 10 日 : 308)

ついに敗戦。

今日正午ラヂオの放送、日米戦争突然停止せし由を公表したりと言ふ (ibid. 1945 (昭和 20) 年 8 月 15 日 : 356)

食料いよゝゝ欠乏するが如し〔中略〕されど今は空襲警報をきかざる事を以て最大の幸福となす (ibid. 1945 (昭和 20) 年 8 月 18 日 : 356)

兎に角に平和ほどよきはなく戦争ほどおそるべきものはなし (ibid. 1945 (昭和 20) 年 8 月 20 日 : 357)

4. キリスト教、弱者、民衆、ヒューマニズム

かように台頭し猛威をふるった日本国家・軍国主義の渦中であって、荷風はこれを「摸倣ナチス政治(『荷風全集』第二十四卷、『断腸亭日乗』1941 (昭和 16) 年 7 月 18 日 : 539)」とさえ呼び、蛇蝎のごとく嫌い、揶揄し、また正面から批判した。

此夕銀座通平日よりも賑にて、三田の学生断髪的女子を伴ひ酔歩するもの尠からず。是陸軍記念祭の当日なるが故なりと云ふ。近年種々なる祭日増加したれば殆記憶するに遑あらず。二月十一日は紀元節の外更に建国祭と称するもの出来たるが如き其一例なり。此等の新祭日はいづれも殊更に国家の權威を人民に示さんがために举行せらるゝやの嫌あり。我国家の何たるかは今更祭日を増加してこれを示すにも及ばざるべし。若し時勢

に应じて之をなすものならんか、是さながら月刊雑誌の折々表紙の絵を変じて人目をひくに異らず、数十年の後には三百六十五日悉く祭日となさざるべからざるに至るべし。（『荷風全集』第二十二卷、『断腸亭日乗』1932（昭和7）年3月10日：481：強調引用者）

街頭には男女の学生白布を持ち行人に請ふて赤糸にて日の丸を縫はしむ。燕京出征軍に贈るなりと云ふ。いづこの国の風習を学ぶにや滑稽と云ふべし。（『荷風全集』第二十四卷、『断腸亭日乗』1937（昭和12）年7月17日：74）

或人のはなしをきくに日本軍は既に仏領印度と蘭領印度の二個所に侵入せり。この度の動員は蓋しこれが為なりと。此の風説果して事実なりとすれば日軍の為す所は歐洲の戦乱に乗じたる火事場泥棒に異らず。人の弱味につけ込んで私欲を逞しくするものにして仁愛の心全く無きものなり。斯くの如き無慈悲の行動は嚙て日本国内の各個人の性行に影響を及すこと尠からざるべし。暗に強盗をよしと教るが如くものなればなり。（*ibid.* 1941（昭和16）年7月25日：542：強調引用者）

歌舞伎座にて真景累ヶ淵も過日禁止となりしが其理由は人の殺されて後化けて出るは迷信にて、国策に反するものと言ふに在る由なり。藝術上の論は姑く置きて、人心より迷信を一掃するは不可能の事なり。近年軍人政府の為す所を見るに事の大小に関せず愚劣野卑にして国家的品位を保つもの殆無し。歴史ありて以来時として種々野蛮なる国家の存在せしことありしかど、現代日本の如き低劣滑稽なる政治の行はれしことは未曾て一たびも其例なかりしなり。此くの如き国家と政府の行末はいかになるべきにや。（『荷風全集』第二十五卷、『断腸亭日乗』1943（昭和18）年6月25日：124：強調引用者）

人間の事業の中学問藝術の研究の至難なるに比して戦争といひ専制政治といふものほど容易なるはなし。治下の人民を威嚇して奴隷牛馬の如くならしむればそれにて事足るなり。ナポレオンの事業とワグネルの楽劇とを比較せば思半に過るものあるべし。（*ibid.* 1943（昭和18）年10月23日：163）

今秋国民兵召集以来軍人専制政治の害毒いよ――社会の各方面に波及するに至れり。親は四十四五才にて祖先伝来の家業を失ひて職工となり、其子は十六七才より学業をすて職工より兵卒となりて戦地に死し、母は食物なく幼児の養育に苦しむ。国を挙げて各人皆重税の負担に堪えざらむとす。今は勝敗を問はず唯一日も早く戦争の終了をまつのみなり。然れども余窃に思ふに戦争終局を告ぐるに至る時は政治は今より猶甚しく横暴残忍となるべし。今日の軍人政府の為すところは秦の始皇の政治に似たり。国内の文学藝

術の撲滅をなしたる後は必づ劇場閉鎖を断行し債券を焼き私有財産の取上げをなさでは止まざるべし。斯くして日本の国家は滅亡するなるべし。(ibid. 1943 (昭和 18) 年 12 月 31 日 : 188-189 : 強調引用者)

こうした日本国家軍国主義の害悪の中でも、とりわけ「キリスト教の衰退」を荷風は苦々しさと共に記している。

其頃〔関東大震災の頃〕にはこの宗旨〔キリスト教〕も猶今日の如く衰微せず、救世軍の如きは太鼓叩き讃美歌うたひて大通を練り行きたり。昭和五年⁶⁾ 満洲戦争起りてより世の有様は一変し、街上にて基督教を説く者殆跡を断ちたり。此夜図らず十年前見知りたる牧師に遇ひ何となく気の毒なる心地せしがまま顔見られぬ中に行過ぎぬ。(『荷風全集』第二十三卷、『断腸亭日乗』1935 (昭和 10) 年 7 月 24 日 : 299)

旧約聖書仏蘭西近世語訳本を読む。日本人排外思想の由つて来るところを究めむと欲するのみならず、余は耶蘇教及仏教が今日に至るまで果していかなる程度まで日本島国人種の思想生活を教化し得たるものありしやを知らむと欲する心起りしが故なり。余は今日に至るまで殆聖書を開きたることなかりき。今俄にこの事あるは何の為ぞ。(『荷風全集』第二十四卷、『断腸亭日乗』1940 (昭和 15) 年 10 月 3 日 : 415)

数日前より毎日台所にて正午南京米の煮ゆる間仏蘭西訳の聖書を読むことにしたり。米の煮ゑ始めてより能くむせるまでに四五頁をよみ得るなり。余は老後基督教を信ぜんとするものにあらず。信ぜむと欲するも恐らくは不可能なるべし。されど去年余は軍人政府の圧迫いよ―甚しくなるにつけ精神上の苦悩に堪えず、遂に何等か慰安の道を求めざるべからざるに至りしなり。邪蘇教は強者の迫害に対する弱者の勝利を語るものなり。この教は兵を用いずして欧洲全土の民を信服せしめたり。現代日本人が支那大陸及南洋諸嶋を侵畧せしものとは全く其趣を異にするなり。聖書の教るところ果して能く余が苦悩を慰め得るや否や。他日に待つ可し。(『荷風全集』第二十五卷、『断腸亭日乗』1943 (昭和 18) 年 10 月 12 日 : 159-160 : 強調引用者)

「信ぜむと欲するも恐らくは不可能なるべし」と、若き日アメリカで抱いた思いをそのまま保ちつつ、キリスト教を弱者の側に引き寄せつつ、だからこそ荷風はマッカーサーと昭和天皇との歴史的な会見に対して次の通りに思いを吐露するのだ。

6) 正しくは昭和 6 年。

昼飯かしぐ時、窓外の芋畠に隣の人語り合へるをきくに、昨朝天皇陛下モーニングコートを着侍従数人を従へ目立たぬ自動車にて、赤坂霊南坂下米軍の本営に至りマカサ元帥に会見せられしといふ事なり、戦敗国の運命も天子蒙塵の悲報をきくに至つては其悲惨も亦極れりと謂ふ可し〔中略〕我等は今日まで夢にだに日本の天子が米国の陣営に微行して和を請ひ罪を謝するが如き事のあり得べきを知らざりしなり、此を思へば幕府滅亡の際、將軍徳川慶喜の取り得たる態度は今日の陛下よりも遥に名誉ありしものならずや〔中略〕余は別に世の所謂愛国者と云ふ者にもあらず、また英米崇拜者にもあらず、唯虐げらるゝ者を見て悲しむものなり、強者を抑へ弱者を救けたき心を禁ずること能ざるものたるに過ぎざるのみ、これこゝに無用の贅言を記して、穂先の切れたる筆の更に一層かきにくくなるを顧ざる所以なりとす（*ibid.* 1945（昭和20）年9月28日：376-377：強調引用者）

もはや、天皇さえも、弱者とされるのだ。そして一人の人間として同情・共感の対象となったのだ。ゾラの自然主義に端を発した荷風の世俗世界に人間の本質を求める眼差しは、場末への眼差しは、弱者に対する眼差しは、つまり共に生きる人間の生の現実に対する、要するに人間社会に対する眼差しは、フランスそしてキリスト教の摂取を経て、帰朝後の社会的現実とその歴史に対する考察を経て、そして大逆事件の衝撃と太平洋戦争体験を経て、その敗戦にいたって一つの頂点に達した。ついに、天皇本人さえも、その国家元首としての政治的あり方を越えて、明治憲法下で神聖不可侵だった天皇の聖性を越えて、「英米」や「日本」といった「国というカテゴリー」を越えて、「昭和天皇の人間宣言」（1946（昭和21）年1月1日）以前に、そうした政治的で超越的なあり方のまさに根底に、世俗的な社会的人間としての存在性を見据えるにいたったのだ。これを人間主義（ヒューマニズム）と呼ばずして何と呼ぼうか。⁷⁾

それは超越的なものではない。まさしく人間たちの共に生きる悲惨な現実の中にこそ、人間の普遍性を見出したのだ。それはもちろん、若き日に摂取したゾライズムの、荷風における完成である。

思い返せば満州事変の頃既に、荷風は次の通り書き記しているのだ。

7) 1926（大正15）年12月14日付の文章の中で荷風は、大正天皇崩御の際の微細にわたる健康状態の新聞報道を、「君主に対する詩的妄想の美感を傷る」ものであるとして、また「我国の天子は生ける時より神の如く尊崇せられしもの」という「古来の伝説」を破棄させたものとして批判している。つまり、当然ではあるが、昭和の時代に入る以前から既に、天皇の聖性が伝説であり妄想であることを明確に意識している。（『荷風全集』第二十一巻、『断腸亭日乗』1926（大正15）年12月14日：474-475）

弱肉は畢竟強者の食たるに過ぎず。国家は国家として悪をなさざれば立つこと難く一個人は一個人として罪惡をなさざれば生存する事能はざるなり。之を思へば人生は悲しむべきものなり。然れどもつら〜天地間の物象を觀るに弱者の肉必しも強者の食ならず。猫と鼠とは同じき家に在りと雖鼠は常に能く繁殖して尽きざるなり。深山幽谷には鷹あり鷺あれども燕雀は猶能く嬉戯する事を得るなり。都會の喧騒に馴れ電線に群棲し人家の残飯に腹を満すは雀の能くする所にして猛鳥の学ぶ事能はざる所なり。猛鳥にして一たび深山を出でゝ人里に來らば忽餌なきに至るべく燕雀は人家の軒に潜んで始めて安全なる事を得るなり。天地間の生物は各其処を得て始めて安泰なり。弱肉必しも強者の食ならず。（『荷風全集』第二十二卷、『断腸亭日乗』1932（昭和7）年10月3日：563：強調引用者）

若き日に「わがフランス」から学んだ、人間の、民衆の、弱者の現実の生活への認識。強者に対抗するばかりでなく、いわば権力から離れ「ありのままの人間」として生きることへの共感……。

しかしそれは、権力からの逃避ではない。生の現実からの「逃げ」ではない。むしろ、そうした困難に正面から抵抗できない弱者たる人間の、生を賭したぎりぎりの抵抗なのではないか。そして、自らが対抗権力となり新たな抑圧の源となることなく、困難な人間的生の現実の中で可能な自由をそれでも守ろうとする一種したたかな戦略であり、人間としての荷風の心の叫びなのではなかろうか。

だからこそ彼は言うのだ。

去年の秋ごろより軍人政府の専横一層甚しく〔中略〕。〔にもかかわらず〕心の自由空想の自由のみはいかに暴悪なる政府の権力とても之を束縛すること能はず。人の命のあるかぎり自由は減びざるなり。（『荷風全集』第二十四卷、『断腸亭日乗』1941（昭和16）年1月1日：473：強調引用者）

繰り返すがこれは逃避ではない。暴走する国家システムから撤退し、社会や共同態の確立に尽力することだ。ここを明確に区別しないと、「非国民」を自認し罪惡感さえ抱いてしまう。しかし、国家からの撤退は共同態や社会からの、つまり他者からの撤退とはまったく違うことなのだ。「非国民」と「非社会人」「非共同態成員」とは質的に異なるのだ。

であるから、このような荷風的一种哀れな姿はむしろ、弱者なりの、現実の人間なりの、人間性を失わずに可能なぎりぎりの、生を脅かす権力に対する「人間的な」抵抗なのだ。そ

のような形での他人との積極的な関わり方であり、「社会的責任」の果たし方なのだ。

荷風のこのような態度を通説は反軍国主義・弱者への共感と評価する。しかしその評価は的確とは言えないだろう。この態度はむしろ積極的な人間性の希求であり、人間性を殺すものに対する抵抗である。荷風がいわゆる弱者に目を向けるのは、それが端的に「弱い」からではない。それが人間の生の、人間の社会的生の、赤裸々な姿だからである。そして荷風が軍国主義、権力を嫌うのは、それが人間性に対する抑圧であると同時に、（人の生の）偽物でしかないからなのだ。

5. 日本の現実：荷風の絶望

ところが、である。荷風の眼前の日本の民衆の姿は、そのような「人間的な」ものではまるでなかったのだ。

銀座通商店の硝子戸には日本軍上海攻撃の写真を掲げし処多し、蓄音機販売店にては盛に軍歌を吹奏す、時に満街の燈火一斉に輝きははじめ全市挙つて戦捷の光栄に酔はむとするものゝ如し、思ふに吾国は永久に言論学藝の楽土には在らず、吾国民は今日に至るも猶往古の如く一番槍の功名を競ひ死を顧ざる特種の氣風を有す、亦奇なりと謂ふべし（『荷風全集』第二十二卷、『断腸亭日乗』1932（昭和7）年3月4日：475）

露店の玩具屋は軍人まがひの服装をなし、軍人の人形をはじめ飛行機戦車水雷艇の如き兵器の玩具を売る。蓄音機販売店にては去年来軍歌を奏すること毎夜の如し。今に至るも人猶飽かずして之を聴く。余つらゝ往時を追憶するに、日清戦争以来大抵十年毎に戦争あり。即明治三十三年の義和团事变、明治卅七八年の征露戦争、大正九年の尼港事变の後は此度の満洲上海の戦争なり。而して此度の戦争の人気を呼び集めたることは征露の役よりも却て盛なるが如し。軍隊の凱旋を迎る有様などは宛然祭礼の賑に異らず。今や日本全国挙つて戦捷の光栄に酔へるが如し。世の風説をきくに日本の陸軍は満洲より進んで蒙古までをわが物となし露西亜を威圧する計畧なりと云ふ。武力を張りて其極度に達したる暁独逸帝国の覆轍を踐まざれば幸なるべし。（*ibid.* 1932（昭和7）年4月9日：500-501）

余この頃東京住民の生活を見るに、彼等は其生活について相応に満足と喜悅とを覚ゆるものゝ如く、軍国政治に対しても更に不安を抱かず、戦争についても更に恐怖せず、寧これを喜べるが如き状況なり。（『荷風全集』第二十四卷、『断腸亭日乗』1937（昭和12）年8月24日：84：強調引用者）

戦争もお祭さわぎの賑さにて、さして悲惨の感を催さしめず。要するに目下の日本人は甚幸福なるものゝ如し。(ibid. 1937 (昭和 12) 年 11 月 19 日 : 114 : 強調引用者)

かように、荷風の見た日本人は、むしろ自由の喪失を喜び、生命の破壊を喜んでいたので。実際には、国家による人間に対する圧迫は着実に進行している。

この日夕刊紙上に全国ダンシングホール明春四月限閉止の令出づ。目下踊子全国にて式千余人ありと云ふ。この次はカフェー禁止そのまた次は小説禁止の令出づるなるべし。可恐とと (ibid. 1937 (昭和 12) 年 12 月 29 日 : 123)

事実、八年前から既に、

今秋内閣更迭以来官吏会社員の月俸は減少し禁奢の訓令普達せられしのみならず、酒肆舞蹈場の取締厳格となりしため銀座始め市内の酒舗はいづれも景況落寞たり、本年は揃ひの衣裳もつくらぬ由なり、昭和現代の世はさながら天保新政の江戸を見るが如く官権万能にして人民の柔順なること驚くに堪えたり、時勢の如何を論せず節約勤儉の令は固より可なり、然れども婦女服飾の如きは蓋し末端の甚しきものにして国家富強の直に基因する所は其他に在り、何ぞや、国民の気概と政治家の良心とに在り (『荷風全集』第二十二卷, 『断腸亭日乗』 1929 (昭和 4) 年 10 月 18 日 : 297 : 強調引用者)

さらに衣服どころか精白米を禁じられてさえ、なお、

皆黙ととしてこれ〔半搗米〕を食ひ毫も不平不満の色をなさず。〔以下十三行半切取、一行抹消。以下欄外補〕国民の柔順にして無気力なること寧驚くべし畢竟二月廿六日軍人暴動の効果なるべし〔以上補〕 (『荷風全集』第二十四卷, 『断腸亭日乗』 1939 (昭和 14) 年 12 月 2 日 : 328 : 強調引用者)

郵便受付箱に新年の賀状一枚もなきは法令の為なるべし。人民の従順驚くべく悲しむべし。(『荷風全集』第二十五卷, 『断腸亭日乗』 1942 (昭和 17) 年 1 月 1 日 : 5 : 強調引用者)

凡そこの度開戦以来現代民衆の心情ほど解しがたきものはなし。多年従事せし職業を奪はれて職工に徴集せらるゝもさして悲しまず。空襲近しと言はれても亦驚き騒かず。何事の起り来るとも唯その成りゆきに任かせて寸毫の感激をも催すことなし。彼等は唯電車の乗降りに必死となりて先を争ふのみ。是現代一般の世情なるべく全く不可解の状態

なり。(ibid. 1944 (昭和 19) 年 3 月 24 日 : 209 : 強調引用者)

このような日本の国民の実態は、昭和のこの頃突然に始まったものではない。実際、大逆事件後十年近く経った大正の時点でも、

一目に見下す路地裏のむさくろしさ、いつもながら日本人の生活、何等の秩序もなく懶惰不潔なることを知らしむ。世人は頻に日本現代の生活の危機に瀕する事を力説すれども、此の如き実況を窺見れば、市民の生活は依然として何のしだりもなく唯醜陋なるに過ぎず個人の覚醒せざる事は封建時代のむかしと異るところなきが如し。(『荷風全集』第二十一卷、『断腸亭日乗』1919 (大正 8) 年 7 月 20 日 : 76 : 強調引用者)

またそのさらに十七年後でもまだ、

余は昭和六七年来の世情を見て基督教の文明と儒教の文明との相違を知ることを得たり。[中略] 日本現代の禍根は政党の腐敗と軍人の過激思想と国民の自覚なき事の三事なり。政党の腐敗も軍人の暴行も之を要するに一般国民の自覚に乏しきに起因するなり。個人の覚醒せざるがために起ることなり。然り而して個人の覚醒は将来に於てもこれは到底望むべからざる事なるべし。[以下六行抹消] (『荷風全集』第二十三卷、『断腸亭日乗』1936 (昭和 11) 年 2 月 14 日 : 387 : 強調引用者)

要するに、ずっと以前から「日本国民を構成する存在が個人であることに目覚めていない」という事実を荷風は執拗に指摘しているのだ。つまりは、「日本国民は自分が人間であることに目覚めていない」のだ。

第五節 結論：日本「社会」

1. 荷風の恥辱

ここで言われている個人とは、エゴのことではなく、国民としての各人のことでもない。荷風がフランスから学んだ普遍的な人間性としての個人のことだ。それは共に生きるという意味での社会性のことであり、個人の覚醒とはその自覚のことだ。個人の覚醒とは決して利己的利益の把握のことではなく、自らと他者の社会的人間性を各人が了解することだ。互いに同じ人間であることを、国家の水準ではなく社会の水準で、国民統合ではなく共生の水準で了解することだ。

なのに日本国民は、まどろんだまま、従順に、自由も自立もなく、「封建時代のむかしと異るところなき」生を営んでいた。つまり、日本国民は、国民ではあっても個人ではなく、

この意味において日本に「人間社会」はなかったのだ。日本にあったのは「日本国」だけだったのだ。日本に人間はいなかった。少なくとも認められていなかった。日本で認められていたのは「国民」だけだった。日本人と日本国民は区別されていなかった。区別のしようがなかった。

この現実を荷風は「個人の覚醒（がない）」と表現したのだ。つまり、自分が人間社会を構成する意志的行為者であること（＝個人であること）に対する気付き、この事実に対する自覚的認識が、日本にはなかったのだ。

そして荷風の言う「社会的共同生活の意義」⁸⁾とは、この意味において互いに個人であること、つまり互いに人間であると意志によって認め行為・実践することだ。そのように生きることだ。そしてそこで生きられる内容こそ荷風が「真の文明の内容」と呼んだものだ。

にもかかわらず荷風は、社会的人間性に生きたエミール・ゾラとは異なり、それを実践しなかった。そのように生きなかった。それができる立場であったにもかかわらず。それが彼の「芸術」であったにもかかわらず。

それは単に専制国家に反逆するかどうかという水準ではない。相手が国家であろうがなかろうが、自由な人間性つまり人間の社会性が明確に侵害されたとき、それに抵抗しなかった。つまり人間として生きなかった。親から受け継いだ莫大な富を有し、文豪としての名声も確立し、つまり庶民よりもずっと容易に世に訴え人間として生きることができる立場であったにもかかわらず。敬愛するエミール・ゾラはそうしたにもかかわらず。そう生きたにもかかわらず。囚人馬車を目撃した荷風が深く恥じたのは、この事実、この現実に対してなのだ。

ここに、荷風の深い絶望がある。大逆事件の絶望が。荷風は国家に負けたと言うよりも、自分自身に負けたのだ。それまでの自分の言説を、人間の現実の生たる自分自身の芸術を裏切ったのだ。生い立ちにキリスト教を背景として持ち、ゾラを通じて自然主義を摂取し、さらに自らの直接体験としてフランスを受容した荷風は、日本のこの欺瞞を堪えがたく感じつつ、しかし覚醒した個人として、人間社会の一員として、生きられなかったのだ。

文学者として、これは「自殺」だ。だからこそ、この後彼は身を恥じ、江戸の戯作者の立場に身をやつすことになる。つまり「偽物」となる。これ以前の、真の荷風、フランスに学んだ荷風はここで死んだのだ。⁹⁾

では、なぜ荷風は死んだのか？ 我々現代日本人は心情的感覚的にそれを理解できてしまうのではないのか？ それはつまり大逆事件後百年以上が経った今日でさえ我々は同じ地点にいるということではないのか？ 我々が永井荷風の「自殺の理由」を心情的に理解できてしまうという事実は、幸徳秋水らの犠牲にもかかわらず、人間的意志的行為不在が現代に生きる我々にまでも引き継がれてしまっていることを示しているのではないのか？

8) 先稿菊谷 2013

2. 国家、共同態、社会

同じことを、より理論的に、厳密に考えてみよう。

国（国家）とは本来的には組織でありシステムだ。つまりそれは知的・理性的な「構築物」であり知性に支えられている（無論構築のうまい下手はあるにせよ）。それはドレフュス事件に際して社会学者デュルケームが端的に言った通りだ。

最近、国家の安泰にとって不可欠だとすべての人が認めている公的行政の機能に支障をきたさないため、この〔個人主義的〕原理の一時的な隠蔽に同意すべきではないかとの疑問が提起された。〔中略〕〔しかし〕公的生活（vie publique）の機関はそれがいかに重要であれ、一つの道具にすぎず、目的のための手段でしかない。もし目的から離れれば、どんなに注意深く手段を維持しても何の役に立とう。生きる（vivre）ために、生（vie）の価値と尊厳を成しているものすべてを放棄するとは、なんと悲しい打算であろう。

生きるために、その理由を失うとは！（*Et propter vitam vivendi perdere causas!*）
（Durkheim 1895：274-275=216-217：強調原著者）

そして、国家においては、各人はもちろん匿名的だ。各人はそれぞれの機能を果たす部品であり、交換可能な存在だ。そこでは人格やその唯一性（ユニークネス）は考慮されない。ドレフュスがそうであったように。

これと異なり、家族や地域に代表される共同態は情的なものだ。それは構成員の感情に支えられている。その感情は喜ばしいものとは限らない。哀れみに基づく相互扶助的共同態もあれば憎しみに基づく排外的共同態もある。しかしいずれも情的であるところの「執着」なのだ。そしてその構成員は、人格的だ。つまり、各人は各人に対して知り合いだ。このような共同態の存立基盤は、国家によるものとは別種の強い拘束をもたらす。

対して社会とは、意志的なものなのだ。それは各人が他者を人間であると「意志する」ことに基づいている。そのような各人の行為、各人の賭けを土台としているものだ。それは他者の人間性＝創造性＝自発性＝自由の承認である。

✓ 9) とはいえ、戯作者として江戸文化の中に日本社会を見出し保存しようとしたことは、荷風なりの抵抗ではある。江戸の戯作者を模するという事は、近代国家日本誕生以前へ戻るとのことだ。つまり、日本「社会」を誦め、日本「文化」にその内実を見出そうとすることだ。言い換えれば、「国民」ではなく、市井に生きる「人間」となることだ。この意味で、江戸戯作者への回帰はゾライズムの延長上にあると言えよう。過酷な時代状況に置かれた荷風には、生の自由と普遍性を持つ「日本社会」を、同時代の「日本国」に見出すことはできなかった。それは、過去の中に、すなわちかつてこの土地に生きた人間の俗な生活の中にしかもはや見出しえなかったのだ。曰く、「軍部の横暴なる今更憤慨するも愚の至りなればその儘捨置くより外に道なし、われ等は唯その復讐として日本の国家に対して冷淡無関心なる態度を取ることなり」（『荷風全集』第二十五巻、『断腸亭日乗』1945（昭和20）年5月5日：319）

しかし、無論、「江戸（社会、時代）」は「日本」ではない。

既に拙著で詳述した¹⁰⁾のでここで繰り返しは避けるが、神的超越性を前提としない場合、つまり人間が人間であり社会が社会であることの根拠をどこまでも、経験に照らし合わせて論理的に考え続けた場合、人間の人間性はそこに賭けるという意志にならざるをえない。

それはゾラや荷風が自然主義文学において追究した、神なき後の世俗性に立脚する科学性与同じものだ。幸徳秋水が『基督抹殺論』を著したのも無論これと無関係ではない。そして、神的超越性を無きものと、少なくとも不要なものとする社会科学・人間科学はそこに立脚せざるをえないのだが、それは日常社会生活においても同じことなのだ。つまり、自由で平等な、しかし可感的でありえない神性に立脚しない人間社会がありうるとすれば、それは他人が人間であることに賭けるという意志に立脚せざるをえない。これを人間的超越性と呼んでもよいだろう。

しかし、そのような人間的超越性によって構成される「社会」を、「国家」や「共同態」と混同してはならない。今見た通り、国家は「知」に立脚する構造物であり、共同態は「情」に立脚する、各人の生に「与えられた」集合的条件・前提である。それらは「意」に立脚する「人間社会」とは質的に異なるものである。

例えば、この「与えられた」という共同態の特徴は、別言すれば「出会いによる」ということである。これは知性による構築物である国家や、「他人を私と同じ意味において人間である」と意志的決断として認識する「社会」とは質的にまったく異なる。その証拠に、共同態は、家族・地域・アソシエーションといった中小の規模にとどまり、決して人類全体を包含しない。

また、国家は、言わずと知れてしばしば共同態を破壊し、社会を侵害する。今まさに荷風と共に見てきた通り、日本国家の軍国主義という暴走は、あまりにも多くの死をもたらした。それは総力戦であり、「全員死んでも勝ちたい」という、落ち着いて考えれば明らかな狂気、システムの暴走だ。実際のところ、この暴走を駆動している人間は、人間としても共同態成員としても、その時点で既に死んでいるのだろう。たとえ「人体」として機能していたとしても、その「人間性」は既に失われているのだろう。

だからこそ、社会が意志に基づくものだからこそ、荷風は言ったのだ、「個人の覚醒」が無いと。それは性質や条件の問題ではなく、組織や情の問題ではなく、目覚め自覚すべき「意志」の問題なのだ。

「人間を人間と認識すること」、それはそれ自体一つの賭けであり、意志的行為だ。認識は受動ではない。ここではそれは一つの能動的行為、意志的实践である。しかしそれは認識だ。相手を創造する認識だ。ここにおいて、主観と客観、「べき」と「である」は根源的に出会うのだ。¹¹⁾

10) 拙著菊谷 2011

11) 拙稿菊谷 2008

なおまた、社会が共同態ではないこと、荷風はこれをよく理解していた。家族や知人や地域からできるだけ距離を取り生きていた。これをもって「個人主義者」と言われるが、そうではない。彼は孤立していたわけではない。共同態から離れ社会に参入し（ようとし）ていた。共同態は与えられたものであり、人の支えであると同時にしばしば桎梏となるのだ。荷風の場合、父とその財力が支えであると同時に、親類関係家族関係が桎梏であったように。

故に、永井荷風に対する「個人主義者」という一般的な評は、筆者には解せない。長い一人暮らしのためか、または文壇を「蛇蝎の如く」嫌った人付き合いの悪さ故にか、荷風といえば極端な個人主義者であると一般に広く信じられているが。もし彼を個人主義者とどうしても呼ぶのであれば、それはむしろドレフュザールとしての個人主義、つまり普遍主義的で人間主義的で社会的な個人主義者という意味においてでしかありえないだろう。

3. 日本国と日本社会

「日本」なるものに立ち返ってみよう。

要するに、日本に「人間社会」は、実際には存在していなかったのだ。日本という概念枠組の中に社会はなく、国（国家）のみがあり、したがって日本人とは日本国民でしかなかったのだ。それが、ドレフュスが最終的には救われた、人権が現実には守られたフランスと、幸徳らを処刑し人間性が踏みにじられたまま満州事変そして太平洋戦争へと猪突した日本との違いだ。

無論フランスに完璧な社会が存在していたというわけではない。しかし、ギリギリのところで人権は、人間性は、社会的に守られた。ドレフュスは殺されることなく、その名誉は回復された。社会性は確かに存在していた。しかし、日本ではそのギリギリの線がいとまたやすく越えられた。そこでは人権は、人間性は踏みにじられた。幸徳らは殺された。そこに普遍的な社会性、共に生きる人間性はない。

ゾラは、人間社会を背負って戦った。戦うことができた。しかし、そのような社会を持たない荷風には、傍観するしか手がなかったのだ。単にゾラが勇敢で、荷風が意気地無しだったということではない。そうではなく、抵抗を実行し結果を勝ち取るための地盤たる人間社会自体が、そもそも日本には存在しなかったのだ。ゾラには、文章で訴えうるフランス「人民」が存在していた。だからこそ「私は告発する（J'Accuse...!）」¹²⁾を書いた。そして支持された。しかし、戦争を祭りのように祝い、「非国民」を迫害する日本「国民」がどうして「人間」を尊重しえようか。他者と共に生きていることを理解しえようか。

確かに、大逆事件に際して抵抗した人間は日本にも存在した。『謀叛論』の徳富蘆花など。しかしそれは一部知識人にとどまっていた。いや、とどまらざるをえなかった。ゾラのように

12) Zola 1898

に新聞紙上を通じて広く訴え、またそれを正しく受け取りうる総体としての人民は、日本には存在していなかったのだから。日本には、従順で覚醒していない「国民」しかおらず、自由で独立した「人間」は、荷風のように外国を知る知識人とどまっていた。そして、一つ間違えば、彼らは「非国民」だった。

日本に生きる人々は、人間ではなく国民としてこそ統合されたが故に、日本はいわば「疑似人間社会」となった。国民は戦後もやはり臣民として、象徴化された超越性の下にある。日本国は身分を制度化しているのだから。日本人民と日本国籍取得者が制度的に一致していない時点で既に、我々の国家は制度的に社会を否定しているのだ。

そのため結局、今日でも我々は日本国と日本社会、日本人と日本国民をほとんど区別できないのではないのか。現代日本人が概して礼儀正しいとすれば、それは（人間ではなく）国民としての自分しか知らないからではないのか。国民としていわば「躰られ」それに馴化してしまっているから、つまり社会を知らないから、だから他者に同調し整然としていられるのではないのか。しかし、それ故にこそ、自分の生を充実させられないのではないのか。そして、荷風のような「ごくまっとうな人間」が、「個人主義者」と非難されるのは、ここに根の深い理由があるのではないのか。

4. 「日本」に生きるということ

そうだとすれば、二十一世紀初頭の今日にあってなお、日本に社会は存在しないのかもしれない。日本に「社会人」はいないのかもしれない。そこでは、社会は国家にあたかも乗っ取られてしまっているかのようであり、そこに存在するのは、国家と国民だけのようだ。社会と人間ではなく。

そして、国家が形式であり道具であり、内実を持たずそれ自身は目的ではない以上、この意味で国家は幻想である以上、日本国民はその幻想の中で空虚な生をそれと気付かずに生きているのかもしれない。または、さらに悪いことに、道具を使う他人の人生の目的を生きているのかもしれない。少なくとも、永井荷風と共に時代と社会思想を追ってきた果ての論理的な結論としては、そうならざるをえない。

では、どうすればよいのか？ 我々が日本で人間として充実した生を生きることを望むのならば、やはり「社会の創造」が不可欠となろう。「社会の創造」とは、この場合、人間的現実の認識であり、自由の認識であり、つまりは荷風が「個人の覚醒」と呼んだものだ。

人が、自由に多様に生きるという普遍性こそ社会性である。このことを荷風は、アメリカから、そしてなによりフランスの文学と現実から学んだ。これと対照を成しているのが、荷風の銀行員としての生活であり、これに対する彼の心底からの嫌悪である。部屋の中で一日金勘定をする機械的で単調な仕事、多様性の乏しさ、他人とのふれあいの欠如、つまりは共に生きるという意味での人間的な社会性 = *convivialité* の欠如……。これらのものこそ、逆

説的に荷風をして人間的生と人間的普遍性の探究へと強く向かわせたのだろう。

翻ってしかし、荷風のような人間を自分勝手な個人主義者とみなすこの列島には、そのような普遍性が未だ存しないようだ。だからこそ「日本社会」の「社会現象」は歯止めが効かないのだ。

日本には「なんのканの言っても、最後のところでは相手も同じ人間だから」という認識がない。そのようにみなそうとする意志がない。そこで他人は、現に生きている具体的人間ではなく、「形」「カテゴリー」へと容易に変ずる。つまり、「他の人間」ではなく、単なる「敵」や「敗者」や「犯罪者」、「弱者」や「障害者」等々としてのみ捉えられる。彼らは共に生きる現実的な人間ではない。ただの形式的なカテゴリーに過ぎない。

それ故に、振り返れば自ら驚愕するほどに冷酷な思考と行為を、歴史上我々はしばしばおこなってきたのだ。そして今もおこなっているのだ。戦争への傾倒は言うまでもなく、様々な水準での生活を競争とみなしこれに適応しようとする態度、能力主義、成果主義、自己責任……。既に貧困家庭では子供が餓死さしている。それが、我々の「日本の現実」だ。

カテゴリーは簡単に切り捨てることができる。それは具体的な内容を持たない「枠」に過ぎないから。「形」に過ぎないから。だから、見ないで済ますことができる。自分の生から消滅させることができる。捨てることができる。そこにあるのは「現実を生きる具体的な人間」ではなく、いわば「空箱」、とどのつまり単なる「物」に過ぎないのだから。

荷風が気付いた普遍的社会的性、人間性、つまりヒューマニズムはしかし、このような思考の対極にある。そしてそれは、今日思われているような「現実離れした理想」ではない。むしろそれは眼前の現実なのだ。それは我々の日常生活に直結している。なんとなれば、既に論じた通り、人間的普遍性（超越性）は、神的超越性とは異なって、人間の生の事実の中にあるからだ。そこに（信じるのではなく）確認できるからだ。それは外的に観察し内的に感知されうる。永井荷風が彼の文学と生き方の中で表現した通り。人を物とみなし、生を死とみなす「現実主義」、ヒューマニズムを単なる理想とさげすむ「リアリズム」こそ、実は現実離れしていることに気付かねばならない。

結びにかえて

これ以上の考察は、「論文」には荷が重い。前稿および本稿における荒削りな議論の精緻な補完とさらなる展開は、「著書」のような、もっと規模の大きな形式の中でおこなうことになろう。前稿および本稿はただ、そのためのいわば「準備稿」として、議論の概要とそれを証拠立てる諸事実の提示にとどまるものである。大逆事件の詳細や幸徳秋水に対する考察をも含む完成稿は、一冊の著書として現在執筆中である。

【参考文献】

永井荷風の文章については、すべて岩波書店刊『荷風全集』（第二次全集、全30巻・別巻1、1992-）から引いた。それ以外の文献については以下の通り。

Durkheim, Emile 1895, “L’individualisme et les intellectuels” = 「個人主義と知識人」, *La science sociale et l’action* (éd. par J.-C. Filloux), PUF, 1970 : 261-278 = 1988 佐々木交賢・中嶋明勲訳『社会科学と行動』, 恒星社厚生閣 : 207-220.

菊谷和宏 2005, 『トクヴィルとデュルケーム — 社会学的人間観と生の意味』, 東信堂.

——— 2008, 「共に生きるという自由について（上・下）— 生の社会学への展望: トクヴィル, デュルケーム, ベルクソン」, 『思想』, 岩波書店, 第1010号・第1011号 : 35-55・148-181.

——— 2009, 「社会科学における身体論のための素描 ~ 現実の一意性を支えるもの, または現実と自己意識のユニークネスについて ~」, 『経済理論』, 和歌山大学経済学会, 第352号 : 23-45.

——— 2011, 『「社会」の誕生 — トクヴィル, デュルケーム, ベルクソンの社会思想史』, 講談社（講談社選書メチエ）.

——— 2012, 「身体・他者・社会 — 生の社会学への道標」, 『和歌山大学経済学会研究年報』, 和歌山大学経済学会, 第16号 : 99-117.

——— 2013, 「永井荷風のフランス受容とその社会思想的含意」, 『和歌山大学経済学会研究年報』, 和歌山大学経済学会, 第17号 : 31-61.

幸徳秋水 1911, 『基督抹殺論』（幸徳秋水全集第8巻）, 明治文献.

Zola, Emile 1898, “Lettre à M. Félix Faure (J’Accuse...!)” = 「共和国大統領フェリックス・フォール氏への手紙」, *La Vérité en Marche*, FRANÇOIS BERNOUARD, 1901 (*Œuvres complètes Emile Zola*, 1928) : 55-69 = 2002 小倉孝誠・管野賢治編『時代を読む 1870-1900』（ゾラ・セクション第10巻）, 藤原書店 : 246-281.

NAGAI Kafu and Japanese Society:
A Continuation of “NAGAI Kafu’s Acceptance of ‘France’
and its Implication in Social Thought”

Kazuhiro KIKUTANI

Abstract

Following our previous paper published in last year’s issue, we discuss NAGAI Kafu’s notion of “society”, together with major events in Japanese modern history, including the “High Treason Incident,” the attempted coup d’état of February 26, 1936, and the Pacific War. His enormous diary written over 42 years is examined in detail. After analysis, the essential distinction between “the Japanese” and the “Japanese nation,” or “Japanese society” and the “Japanese State” is clarified according to current thinking.